

川

新美南吉

青空文庫

四人が川のふちまできたとき、いままでだまってついてくるよ
うなふうだった薬屋くすりやの子の音次郎君おとしろうが、ポケットから大きな
かきをひとつとり出して、こういった。

「川の中にいちばん長くはいつていたものに、これやるよ」

それを聞いた三人は、べつだんおどろかなかつた。だまりんぼ
の薬屋の音次郎君は、きみのような少年で、ときどきくちをきると、
そのときみなで話しあっていることとはまるでべつの、へんてこ
なことをいうのがくせだったからである。三人は、なによりも、

その賞品に注意をむけた。

つややかな皮をうすくむくと、すぐ水分の多いきび色の果肉があらわれてきそうな、形のよいかきである。みなはそれを、百ひやく刃めがきといっている。このへんでとれるかきのうちでは、いちばん大きいうまい種類である。音次郎君の家のひろい屋敷やしきには、かきや、みかんや、ざくろなど、子どものほしがるくだもの木がたくさんある。音次郎君がきみのような少年であるにもかかわらず、友だちが音次郎君のところへ遊びにいくのは、くだものももらえるからだ。

ところで、賞品のほうはまず申しぶんなしとして、川のほうはどうであろう。秋もすえにちかいことだから、水は流れてはいな

い。けれどこの川は、はばがせまいかわりに、赤土の川床が深くえぐられていて、つめたい色にすんだ水が、かなり深くたたえられている。夏、水あびによくきたから、だいたい深さの見当はつくのである。へそのへんまでくるだろう。

三人はちよつと顔を見あわせて、どうしようと目で相談したが、すぐ、やつたるかと、やはり目で、話をまとめた。するともう、森医院の徳とくいち一君が、ズボンのバンドをゆるめはじめた。なにか、しがいのあるいたずらをするときのように、顔がかがやいている。ほらふきの兵へいたろう太郎君は着物だったので、まずかばんをはずして、しりまくりし、パンツをぬいだ。久きゆうすけ助君もおくれてはならぬと、ズボンをぬいで、緑と黄のまじった草の上ですてた。

ぬいでしまうと、へんに下がるくなつた。風が素足すあしにひえびえと感ぜられる。

徳一君を先頭に、川つぷちの草にすがりながら、川の中にすべりおりた。ひと足入れると、もう、ひざっこぶしの上まで、水がくるのである。

「つめたいなあ」

足から身内みうちにあがつてくる冷気が、しぜんに三人にいわせるのであつた。

かきがほしいだけではなかつた。いまじぶん、おしりをまくつて水にはいることが、おもしろいのだつた。そこで三人は、上で見ている音次郎君にいわれるまでもなく、まん中あたりまではい

つていった。案のとおりだった。水はひたひたとはいあがつてきて、久助君のおへその一センチばかり下でとまった。

三人は、むきあつて立つて、じぶんのへそをあらためてながめたり、ひとのへそを観察したり、じぶんたちのざまのおかしさにクスクスわらったりした。しかし、ものをいうと、歯がカチカチ鳴つて、みように力が背中せなかに集まるような気がした。動くとつめたさがいつそうひどく感じられた。

しばらくみなだまっていた。どこかで、日ぐれの牛がさびしげに鳴いた。それをしおに、徳一君がげんしゆくな表情になつて、そろりそろりと岸の方へ動きだした。まだぬれていないところをなるべくぬらさぬように、ゆっくりいくのである。久助君と兵太

郎君は顔を見あわせたが、もうわらわなかつた。

久助君はふたりきりになると、このゆうぎはひどくばかげていると感じられたので、まだがまんすればできたのだが、勝ちを兵太郎君にゆずることにした。徳一君がしたように、そろりそろり岸の方へ歩みよつて、草にすがつて上にあがつた。

草をふんで立つと、ひえのために、足のうらがしびれているのが、よくわかる。すぐ手ぬぐいで足から腰をふいて、パンツとズボンをはいた。からだがふるえているから、ズボンをはくときよろけていつて、やはりズボンをはいている徳一君にぶつかつた。

まだ兵太郎君は、川の中にはいつている。もう勝ちはかれにきまつたのだから、なにも、やせがまんしているわけはないのだが、

とくいなところをひとに見せたいのだろう。こういう点が、ほらふきの兵太郎君のばかなところである、久助君は思つて見ていた。兵太郎君は平気をよそおつて、南の方をむいて立つていた。負けたふたりはからかいたくなつて、上から、

「がんばれツ、がんばれツ、兵タン」

と、声せいえん援した。音次郎君も、どういうつもりかそれに声をあわせた。

「かき、たべてしまおかよ」

と徳一君が、いたずらつぽい目を光らせながらささやいたとき、久助君は、そいつは兵太郎君がかわいそうだという気持ちと、そいつはおもしろいという気持ちがいっしょに動いた。兵太郎君を

おこらせるのは、とてもおもしろいということをし、これまでの経験で、みなよく知っているのである。

川の中の兵太郎君が、聞きつけて、

「こすいぞツ」

と、さげんだ。

それもうはじまった。はやくしろ、はやくしろ。

徳一君がすばやく、音次郎君の手からかきをうばいとして、ひと口かぶりついた。案のじよう、きび色の美しい果肉があらわれた。それを徳一君からうけとると久助君は、徳一君のかじった反対側のほうを、大きくかじった。そして、あとをもとの音次郎君にわたした。すると、音次郎君もひと口かじったので、かれもま

た、このいたずらに参加していることがわかった。

兵太郎君は、いまさらわめいても追っつかぬことを見てとった。かれは先のふたりのように、ゆっくり岸に近づいた。それから、ふちの草につかまった。けれど、つかまったままじっとしている。なにか思案しあんしているようすである。

こちらの三人は、顔を見あわせた。三人の顔から、ちやめ気が、しばらくためらって、そしてぬけていった。しんとなった。

青ざめた顔を兵太郎君がしかめた。そして腹がいたいときのよ
うに、腰をおった。

「どうした、兵タン」

と徳一君が、おどおどしてきいた。

「あがつてこいよ」

と、久助君もいっしよにいった。

それでも兵太郎君は、かた手で草につかまっただまま、動こうとはしなかつた。ほおげたの下の、ひとところ、チョークでもなすりつけたように白いのが、久助君の目にいたいたしくうつつた。これはたいへんだと思った。

三人はよつていつて、兵太郎君のつめたい手をにぎつて上にひっぱりあげると、兵太郎君は死にかかりの人のように力なく、三人のなすがままになった。あがつてきてもかれは、ベソをかいだ顔つきで、ぼけんとつつ立っているの、三人はしまつをしてやらねばならなかつた。徳一君と久助君は、めいめいの手ぬぐいを

提^{ていきよう}供

して、兵太郎君のかた足ずつをふいた。音次郎君は、草の上からパンツをひろつてきた。兵太郎君は、なにからなにまで、みな、ひとにさせた。ぼうしまでかぶせてもらった。

ところで、兵太郎君は、すっかり身じたくができたのに、歩きだそうとしなかった。ときどきいたみがおそうかのように、顔をしかめて腹のところからからだをおった。

あとの三人は、こまったなア、というように顔を見あわせた。しかし、ほんとうに兵太郎君のからだに故障ができたかどうか、三人は半信半疑だった。

というのは、兵太郎君はいぜんから、死んだふりや、腹のいたむまねが、ひじょうにうまかったからである。フットボールが飛

んできて、兵太郎君の頭にあたりでもすると、かれはふらふらとよろめいて、地べたの上にところきらわずばったりたおれ、あたりどころが悪くて、自分はおだぶつしてしまったのだというようすをして見せるのであった。そのまねは、真にせまっていた。久助君はまだ、人間がフットボールにあたって死ぬところを見たこととはないが、もしそういうことがあるならば、きつと兵太郎君がするとおりの所作しよさくをして死ぬだろうと思っていた。たびたび兵太郎君のまねにだまされたものでも、いったん兵太郎君が、死んだまねをしてたおれると、こんどこそほんとうに死んでしまったのではないかと思うのだった。そして、みながそろそろ心配しかけるころを見はからって、死んでいた兵太郎君は、ひやつというよ

うなさげび声をあげて、生き返ってくるのが常だったのである。

だからきょうも、あの手ではないかと、三人は思った。賞品のかきをせしめられたはらいせに、きょうのしばいはいつもより手がこんでいて、長いではあるまいか。

しかし、じつさい顔の色がいつもより青い。それに、フットボールがあたったくらいのこととはちがって、かなり長く、かふくぶ下腹部をひやしたのである。病気になる可能性は、ほんとうにあるのである。

それなら、こりやじぶんたちも同じように腹をひやしたのだから、同じようなことになるのではないかと、久助君は、こんどはじぶんの腹が心配になりだした。そう思うと、なんだかへその下

の方がしくしくするみたいである。

「よし、おぶされッ」

と、徳一君は、しやがんで背中せなかを兵太郎君の方にむけた。兵太郎君は力なくおぶさった。

音次郎君が徳一君のランドセルを持ち、久助君は、兵太郎君の足からぬげて落ちたきたないげたを持った。どさくさまぎれで地に落ちて砂にまみれた食いかけの百ひやくめ刃やぐらがきを、久助君はポーンと川の中へけとばした。そして三人は出発した。

つぎの朝久助君は、山羊やぎにえさをやるため、小屋の前へいって、ぬれた草を手でつかんだとき、きのうの川のできごとを思い出した。と同時に、兵太郎君はどうなつたろうという心配が、重く心にのしかかってくる。

まもなくまた忘れてしまった。だが心配の重さだけは忘れているまも心にのこっていて、なんとなく不愉快ふゆかいであつた。

七時半になると、いつものように家を出た。学校のうらてへむかつて一直線に走っている細い道に出たとき、五十メートルほど前を、薬屋の音次郎君が、なにかつまらないことでも考えているように、拍手をしては右手を外の方へうつちやりながら歩いていくのを見た。

久助君は、ふたりで心配をわかちあい、ひとりで苦しんでいることからまぬがれようと思つて、走つていった。けれど音次郎君は、きのうのことなどまるで気にもかけていないようすであつた。じぶんはとりこし苦勞をしていたのかと久助君は思つて、ほつとした。なんでもなかつたんだ。

音次郎君は久助君といつしよになつても、あいかわらず拍手をつづけながら、じぶんひとりのつまらない考えを追つて歩いてた。まもなくうしろから、ゴツゴツとランドセルの音をさせて、だれか走つてきた。森医院の徳一君である。このあいだ新調したばかりのぼうしのひさしを光らせながら、「おはよう」と、元氣よく近づいてきた。そして、こうきいた。

「きょう、算術の宿題なかったかね」

徳一君もやはり、きのうのことなんか気にしていないのである。事実、なんでもないのだろう。この世には、そうかんたんに、できごとはおこらないのだ。

三人は教室にはいった。ほかのものはもう、たいていきている。教室の中にも十人ほどいる。そのなかには兵太郎君がいないことを、久助君はひと目でたしかめた。

兵太郎君の席は、徳一君のすぐとなりにあつた。用具がそこにはいつているかと思つてそちらを見たとき、久助君は、徳一君もやはりそういう目つきで見ているのを発見した。のみならず、音次郎君もやはり、兵太郎君の席を見ていた。

みんな、心のおくで、同じ心配をもっているのだと、久助君はわかった。

徳一君が、ちよつと兵太郎君のつくえのふたをあけた。久助君は心臓しんぞうがどきつくのをおぼえた。中には、なにもはいつていなかった。

その日から、兵太郎君は学校へこなくなつてしまつたのである。五日、七日、十日と、日はたつていったが、兵太郎君は学校へすがたを見せなかつた。しかしだれひとり、兵太郎君のことをくちにするものがない。久助君は、それがふしぎだった。五年間もともに生活したものが、ふいにぬけていっても、あとのものたちは、なにごともしなかつたように平氣である。だがこれが

あたりまえのようにも思われた。

久助君は、徳一君と音次郎君だけはじぶんと同じように、消えてしまった兵太郎君のことで心をいためていることはわかっていた。それなのに、この三人は、ひとことも、兵太郎君についていわないのであった。そればかりでなく、みようにおたがいの目をおそれて、おたがいにさけあうようになった。

さまざまに、久助君は思いまどった。たとえば、先生にいつさいのことをうちあけて、あやまってしまったらどうだろう。心がかかるくなるのではあるまいか。しかし、あの川のことがもとで、じっさい兵太郎君は病気になったのなら、兵太郎君がそれをだましているはずはない。おとうさんかおかあさんに、話したにそう

いあるまい。そうすれば、おとうさん、あるいはおかあさんの口から、先生のところへ情報はとどいているはずである。ひよつとすると、先生はもうなにもかもごそんじなのもかもしれない。それを、わざと知らんふりをしておられるのは、久助君たちが自首して出るのを待つておられるのではあるまいか。そんなふうに思つて、知らず知らず首をすくめながら、先生の顔をうかがうこともあつた。

あるときは、自首したい衝動にひどくかられた。それはちやうど国史の時間であつたが、いつもおもしろく聞ける国史の話が、心の中の煩悶はんもんのために、ちぎれちぎれになつて、ちつともおもしろくないので、こんなになさけないめにあうのも、じぶんがひ

みつをもっているからだ、いつてしまひさえすれば心は解放されるのだ、と思うと、とつじよ立ちあがって、

「先生、ぼくたち三人で、兵太郎君をだまして、病気にしたのです！」

と、さけびたくなつた。しかし、平常とすこしも変わらないあたりの空気が、なぜかその衝動をおさえさせた。ま昼間、心もたしかなのに、久助君は、じぶんのすぐかたわらから、もうひとりの久助君が、すくつと立ちあがって、

「先生！」

といいはじめる幻影げんえいを、三ども四ども、はつきり見たのだつた。耳がじいんとなつて、両手にあせをにぎっていた。

二カ月、三カ月とすぎた。まだ兵太郎君は、学校へすがたを見せない。そのあいだ、久助君は兵太郎君について、ほとんどなにも聞かなかつた。ただ一ど、こういうことがあつた。ある朝、久助君が教室にはいつてくると、ちようどいきちがい、ふたりの級友が、つくえをひとつ、ろうかへさげ出していった。

「だれのだい」

と、なにげなくきくと、ひとりが、

「兵タンのだよ」

とこたえた。それだけであつた。それからこういうことがもう一どあつた。薬屋の音次郎君がある午後、うら門の外で久助君を待っていて、いまから兵タンのところへ薬を持っていくから、いつ

しよにいいこうときそつた。久助君はびっくりしたが、同意して出かけた。薬は、アスピリンという、よく熱をとる薬だそうである。兵太郎君はかぜをひいたのがもとだから、このアスピリンで熱をとれば、すぐなおつてしまうと、音次郎君は、医者のように自信をもつていった。ほんとうにそうだと、知らないくせに久助君も思った。それにしても、それほどよくきく薬なら、なぜもつと早く持つていってやらなかつたのだろう。やがて、いつもは通らない村はずれの常念寺じょうねんじの前まへにきた。常念寺の土塀どべいの西南のすみに、小さな家が土塀によりかかるように、（事実、すこしかたむいてゐる）建っている。それが兵太郎君の家である。ふたりは、土塀にそつて歩いていった。兵太郎君の家の前にきた。入口があいて

いて、中は暗い。人がいるのかいないのか、コトリとも音がしない。日のあたるしきいの上で、ねこが前あしをなめているばかりだ。ふたりの足はとまらなかつた。むしろ、足ははやくなつた。そして、通りすぎてしまい、それきりだつたのである。

久助君は、ほかの友だちとわらつたり話したりするのが、きらいになつた。そして、ひとりでぼんやりしていることが多かつた。それから、ひどく忘れっぽくなつた。なにかかけて忘れてしまふようなことが多かつた。いま手に持っていた本が、ふと気づくと、もう手になかつた。どこにおいたか、いくら頭をしぼつても思い出せないというふうであつた。お使いにいつて、買うものを忘れてしまい、あてずっぽうに買って帰つて、まるでラジオで聞

く落語みたいだとわらわれたこともあった。

もとから久助君は、どうかすると見なれた風景や人びとのすがたが、ひどく殺風景さつぷうけいにあじけなく見え、そういうもののなかにあつて、じぶんのたましいが、ちょうど、いばらの中につつこんだ手のように、いためられるのを感じるものがあつたが、このごろはいつそうそれが多く、いつそうひどくなつた。こんなつまらない、いやなところに、なぜ人間は生まれて、生きなければならぬのかと思つて、ぼんやり庭の外の道をながめていることがあつた。また、つめたい水にわずか五分ばかりはいつていただけで、病気にかかり死なねばならぬ（久助君には、兵太郎君が死ぬとか思えなかつた）人間というものが、いつそうみじめな、つまら

ないものに思えるのであった。

三学期のおわりごろ、ついに兵太郎君が死んだということ、久助君は耳にした。べんとうのあと、久助君は教だんのわきで日なたぼっこをしていた。すると、むこうのすみで話しあっていた一団のなかから、

「兵タンが死んだげなぞ」

と、ひとりがいった。

「ほうけ」

と、ほかのものがいった。べつだん、おどろくふうも見えなかった。久助君もおどろかなかつた。久助君の心は、おどろくには、くたびれすぎていたのだ。

「うらのわら小屋で死んだまねをしとつたら、ほんとに死んじやつたげな」

と、はじめのひとりがいうと、ほかのものたちは明るくわらつて、兵太郎君の死んだまねや腹痛はらいたのまねのうまかつたことを、ひとしきり話しあつた。

久助君は、もう聞いていなかつた。ああ、とうとうそうなつてしまつたのかと思つた。そつとかた手を、ゆかの上の日なたにはわせてみると、じぶんの手はかさかさして、くたびれていて、悲しげに、みにくく見えた。

日ぐれだった。

久助君のからだのなかに、ばくぜんとした悲しみがただよって
いた。

昼のなごりの光と、夜の先ぶれのやみとが、地上でうまくとけ
あわないような、みようにちぐはぐな感じの、ひとときであった。

久助君のたましいは、長い悲しみの連鎖れんさのつづきを、くたびれ
はてながら旅人たびびとのようにたどっていた。

六月の日ぐれの、びみような、そして豊富な物音が戸外にみち
ていた。それでいてしずかだった。

久助君は目をひらいて、柱にもたれていた。なにかよいことが

あるような気がした。いやいや、まだ悲しみはつづくのだという
気もした。

すると遠いざわめきのなかに、ひと声、子山羊やぎの鳴き声がまじ
ったのを聞きとめた。久助君はしまったと思つた。生まれてから
まだ二十日はつかばかりの子山羊を、昼間川かわ上へつれていつて、こん
虫ちゅうを追つかけているうち、つい忘れてきてしまったのだ。しまつ
た。それと同時に、子山羊はひとりで帰つてきたのだと確信をも
つて思つた。

久助君は、山羊小屋の横へかけだしていった。川上の方を見た。
子山羊は、むこうからやつてくる。

久助君には、ほかのものはなにも目にはいらなかつた。子山羊

の白いかれんなすがただけが、——子山羊と自分の地点をつなぐ距離だけが見えた。

子山羊は、立ちどまっては川つぷちの草をすこし食^はみ、またすこし走っては立ちどまり、無心に遊^びながらやってくる。

久助君は、むかえにいこうとは思わなかった。もうたしかにここまでくるのだ。

子山羊は、電車道もこえてきたのだ。電車にもひかれずに。あ^どての土手のこわれたところも、うまくわたったのだ。よく川に落ちもせずに。

久助君は胸があつくなり、なみだが目にあふれ、ぽとぽと落ちた。

子山羊はひとりで帰ってきたのだ。

久助君の胸に、ことしになつてからはじめての、春がやつてきたような気がした。

四

久助君はもう、兵太郎君が死んではいない、きつと帰ってくる、という確信をもっていたので、あまりおどろかなかつた。

教室にはいると、そこに、——いつも兵太郎君のいたところに、洋服にきかえた兵太郎君が、白くなつた顔でにこにこしながらこしかけていた。

久助君は、じぶんの席へついてランドセルをおろすと、目を大きくひらいたまま、兵太郎君を見てつつ立っていた。そうするとしぜん顔がくずれて、兵太郎君といっしよにわらいだした。

兵太郎君は、かいきよう海峽のむこうの親せきの家にもらわれていっ

たのだが、どうしてもそこがいやで、帰ってきたのだそうである。それだけ久助君はひとから聞いた。川のがもとで、病気をしたのかしなかつたのかは、わからなかつた。だが、もうそんなことはどうしてもよかつた。兵太郎君は帰ってきたのだ。

休けい時間に、兵太郎君が運動場へはだしでとび出していくのをまどから見たとき、久助君は、しみじみこの世はなつかしいと思つた。そして、めつたなことでは死なない人間の生命というも

のが、ほんとうにとうとく、美しく思われた。

そこへもうひとつ思い出すことがあった。それは、きよ年の夏、兵太郎君と川あそびにいつて、川からあがったばかりの、ぴかぴか光るおたがいはだかんぼうを、おいしげった夏草の上でぶつかけあい、くるいあつて、たがいに際限さいげんもなくわらいころげたとだった。

青空文庫情報

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1974（昭和49）年1月30日12版発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：ゆうい

2000年1月27日公開

2006年1月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

川 新美南吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>